

2017 年度活動報告 日本語教育基礎・日本語教育基礎演習

藤原 由紀子（関西学院大学 日本語教育センター）

1. 授業の目的

本科目は、学習者向けグローバルスタディーズ科目¹として日本語教育センターが開講するものである。そこで、日本語教育基礎では履修生に、①日本語を外国語として見つめ直す、②初級の活動を考えて実施する、③自分自身の日本語を振り返る、といった活動を通し、日本語学習者の立場に立つことを経験してもらった。それにより、日本語教育についての基礎的な知識を学ぶとともに、多文化共生社会における自己のあり方、今後どのような日本語の使用者でありたいか、について考える機会を与えることを目的とした。一方、日本語教育基礎演習では、日本語教育基礎で学んだことを踏まえ、実際に教案作成や模擬授業を行い、将来、国内の地域日本語教室や留学先の日本語授業などで、TA やボランティアとして活躍できるような、より実践的な日本語教育能力の養成を目指した。

2. 授業概要

2-1. 日本語教育基礎

今年度から開講クラスを1クラス減らし、2クラスの開講となった。春学期は上ヶ原キャンパスで2クラス（履修者合計 47 名）秋学期は上ヶ原キャンパスと三田キャンパスで、それぞれ1クラスずつ開講した（履修者合計 55 名）。秋学期の上ヶ原キャンパスの日本語教育基礎は1クラスしか開講されなかったこともあり、履修生は抽選により決定された。

授業は、教員による講義とグループ・ディスカッションを平行して行う形で進め、履修生が自分自身で考え、気づきを得ることができるよう工夫するとともに、グループ活動を数多く取り入れることによって、社会人基礎力である「発信力」「傾聴力」「協働する力」の養成を目指した。また、活動では、グループごとに初級学習者向けのミニ活動を考えさせ、互いに活動実施者と学習者の役割を交替で体験させることにより、日本語を教える立場と日本語を学ぶ立場、両者の視点から活動や日本語を見る機会を与えた。その後、ミニ活動中の発話を録音したものを文字に起こし、分析させることによって、履修生が自らの日本語を客観的に振り返る機会を設けた。最終レポートでは、それら

¹ 多文化共生社会の実現に貢献する世界市民となるために、異文化への理解を深めるとともに、グローバルな視点でものを見つめることのできる力を身につけ、日本人としてのアイデンティティの確率をサポートするという目的で設置されている全学科目。

すべての授業活動および講義の内容から得た気づきをまとめ、そこから今後自分自身が日本語学習者に対してどのように接していくのか、どのような「世界市民」たらんとするのかについて考察を深め、まとめる課題とした。

2-2. 日本語教育基礎演習

日本語教育基礎演習は、日本語教育基礎を既に履修した学生を対象として開講している。日本語教育基礎同様、こちらも今年度より開講クラスを1クラス減らした。春学期（履修者合計4名）・秋学期（履修者合計9名）それぞれ1クラス、上ヶ原キャンパスで開講した。

日本語教育基礎演習では、初級教材の分析や例文の検討などを行った上で、①全員で、②グループで、③個人で、という3段階で模擬授業を実施した。模擬授業の準備には、履修生全員が非常に熱心に取り組んでおり、特にグループで教案を練っていく過程では協働の力がうまく発揮され、授業案が見事に改善されていく様子が観察された。履修生には、模擬授業を行うごとに気づきや反省点をまとめたコメントシートを提出させ、教員からのフィードバックを行った。また、履修者の中には、国際社会貢献活動で既に海外で日本語を教えることが決まっている者もいたため、筆者の経験から海外（特に開発途上国）における日本語教育現場の実情や注意点などについても、様々な情報を提供した。

3. 成果と今後の課題

レポートには、日本語を外国語として見た時に見えてくる言語の規則やそれを無意識に使いこなしている自分に対する率直な驚き、やさしい日本語で話すことの難しさなどが語られており、本授業で多くの気づきを得ていることがわかった。また、日本語教育基礎において、履修生から特に気づきが多かったという声が多く寄せられた活動が、自らの発話の文字起こしとその分析活動である。この活動は、今年度秋学期より初めて行った試みであったが、自分の発話を文字にしてみても、いかに「適当な話し方をして」いるかや、初級の学習者相手であるにも関わらず、「相手のことを考えずに自分が言いたいことだけ一方的に話して」いたなど、自分の発話を改めて客観的に観察することで、話し方に対する意識の変化や行動変容が見られた。

最後に今後の改善点であるが、本科目の履修生と留学生が実際に交流する場を授業の中に作っていきたい。履修生の提出物やレポートなどを見ていると、キャンパスにいる留学生とほとんど交流がないという者が多い。現在、日本語教育基礎、日本語教育基礎演習どちらの授業も、学習者役は実際の留学生ではなく、履修生（主に日本人学生だが、超級レベルの学部留学生の履修生も数名いる）が務めている。今後は、交換コーディネーターとも相談の上、グローバルスタディーズ科目の授業に、留学生に参加してもらえるような体制を整えていきたい。